

おいとさん (51才)



急に思い立ち、二か月前に秋田を出発して、やっと着いたところですよ。お友だちとお供二人、歩いてきました。ご近所にはないしよです。



全国から神宮へ向かった「伊勢参り」
伊勢参りは、江戸時代に大流行。日本全国からたくさんの方が伊勢へやってきました。旅する人は道中記という旅日記を記すことも多く、全国にたくさん残っています。おいとさん一行も道中記をのこしました。

おいとさんの旅をもっとくわしく

ぶんきゅう 文久2年(1862) おいとさん一行がのこした道中記(意訳)

● 十月二十九日
松坂、櫛田、小俣を通り、宮川を越える。渡し賃はいらなかった。渡し賃は三日市様よりのごちそうだった。櫛田でのお昼ごはんは四十八文、昼の人足(荷物運びなど力仕事をする人)に五十文、二か所の橋の通行料で四文、茶代で五文、かす紙に十七文、案内料に二十四文、散髪に三十二文、神楽の賽銭に百文、両替代で五文の合計二百八十五文を使った。

● 十一月一日
外宮、内宮、天の岩戸、二見浦、朝熊山、末社(神宮が持つ小さな神社)へいった。賽銭に八百七十八文、両替に百文、お昼ごはんは二百六十八文、案内や酒代に五十文、三役(神域への通行料)に金一両二朱に二百文、三日市でのお茶代に金一朱、お祓代に百五十文などを払った。

お守り
十二文

伊勢
まんきんたん
萬金丹(薬)
三十七文

奈良
しかせんべい
三十七文

お茶
五文

江戸
くし
二百四十四文

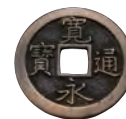
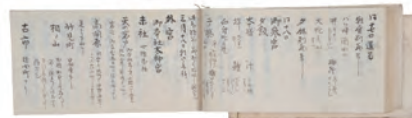
わらじ
十四文

● 十一月二日
伊勢を出発。水難(水の事故)のお守りに十二文、お昼ごはんは二百二十文、二か所の橋の通行料に四文、茶代に五文、わらじに十四文、六軒(現在の松阪市)に宿泊。
参考文献：『本荘市史』通史編II(一九九四年)、『本荘市史』史料編IV(一九九八年)

おいとさんは伊勢にたどり着くまでに、長野の善光寺や京都、奈良、四国の金毘羅山、高野山にも立ちよりました。帰りは、江戸に立ちよりました。帰ってきたのは十二月二十四日です。

道中記を見てみよう!

おいとさんの道中記には、使ったお金が細かく記されています。道中記は、日記とおこづかい帳をかねていました。展示されているほかの道中記も見てみてください。



1文=約13円
1両=約50,000円

※現在の価値はあくまで目安として示したものです。

がくげいん 学芸員 太田さんのウラ話



おいとさんの道中記を参考にしつつも、季節を伊勢参りが最も多い春にしています。おいとさんたちは、実際には、参宮客が少ない10月から11月に来ていました。客の少ない時期は、いろいろな料金も安いです。おいとさんの年齢は実ははっきりわかりませんが、当時子育てなどが落ち着いて、女性が旅に出ることが多かった40～50代だと考えられています。

おいとさんたちをじっくり^{かん さつ}観察してみよう!

場所 おんし みっかいちたゆうじろうやしき うちげんかん
御師・三日市大夫次郎屋敷の内玄関

時間 春(3月ごろ) 午後1時ごろ

江戸時代、伊勢参りに来た人たちは、御師えいしという人の屋敷に泊まりました。御師は全国へ神宮のお札を配りに行ったり、神宮にお参りするために全国からやってくる人たちのお世話をしたりする人です。伊勢神宮には数百もの御師みしがいたとされます。三日市大夫次郎さんも、そのうちのひとりでした。御師の代わりをつとめる手代てだいが、たどり着いたおいとさん一行を出迎えています。

おいとさんはどんな
着物を着ているでしょう？

女性じょせいが旅うきよえをしている様子ふくを
描いた浮世絵から、旅の服そう
装を見てみましょう。

＊ほかにも展示室には旅の
てんじしつ
服装があるのでさがしてみ
てください。



御師の手代

おいとさん

ほんじょう

おいとさんの友だち

中川屋亀吉さん

佐々木屋銀蔵さん
(荷物運び・道中記への記録担当)

(おいとさんの旅行計画)

この日

松坂(今の松阪市)

櫛田(同)

おばた |
小俣(今の伊勢市)

山田(同)

2日目

げくう
外宮

あま | 天の岩戸

ないくう
内宮

あさまやま
朝熊山へお参り

ふたみのうら
二見浦
(すべて今の伊勢市内)

3日目

山田を出発



荷物はどこでしょう？

おいとさんと友だちは荷物を持っていません。

だれかがまとめて運んでいるのでしょうか？